

現生のウルシの成長解析からみた 下宅部遺跡における ウルシとクリの資源管理

Management of Lacquer and Chestnut Resources
during the Late Jomon Period at the Shimo-yakebe Site
Deduced from the Growth Trends of Extant Lacquer Trees

能城修一・佐々木由香

NOSHIRO Shuichi and SASAKI Yuka

はじめに

①試料と方法

②結果

③考察

【論文要旨】

下宅部遺跡から出土した縄文時代中期中葉から晩期中葉の木材を対象として、ウルシとクリの資源管理について検討した。下宅部遺跡出土木材の直径分布と成長輪数の解析により、クリとウルシは、現在の薪炭林やウルシ林とは異なり、多様な太さと年齢の個体が生育する柔軟な管理がなされていたと指摘されていた。本論では、当時のウルシ木材の直径成長を解析し、これを現在植栽されているウルシの成長と比較し、縄文時代のウルシとクリを中心とした森林資源管理を検討した。その結果、ウルシとクリは、直径6~8 cmで8年生未満の個体を丸木として主に利用する一方で、それ以上の大きさの個体も適宜割って活用しており、多様に利用されていた。他の樹種は、細く若い木を丸木で使うものと、太く年のいった木を割って使うものに分かれていた。現生のウルシの成長と比較すると、縄文時代のウルシは成長が遅く、ほぼクリと同様で、当時は現在のウルシ畑よりも密に生えていたと推定された。下宅部遺跡のクリとウルシの成長は、新潟県青田遺跡の晩期末葉の柱材に使われているクリよりも遅く、現在の青森県田子町の萌芽によって再生した二次林のクリとほぼ同等であった。下宅部遺跡のごく近くにあったと考えられるクリ林とウルシ林の周辺には二次林と自然林があり、その成長は二次林、自然林の順で遅くなる傾向が確かめられた。

【キーワード】 縄文時代、森林資源、ウルシ、クリ、管理